

『星の王子さま』を読み終えて

いおりまなぶ

フランスの小説家サン・テグジュペリが書いた不朽の名作である。なにせ、私のように普段決して小説など読まない人間でも、名前くらいは当然のように知ってはいるのだから。これまではただの空想的なファンタジーにすぎないと軽く考えていたが、実際に文庫本を手にとって中身を知るほどに、私は正直なところ、自分が大きな勘違いをしていたことに気づかされると同時に、軽い衝撃を受けた。それはすなわち、心の中で自分自身に向かって、

『これは決して『子ども向け』に書かれた内容なんかじゃない!!
作者の強い批判が込められた、大人に向けてのメッセージなんだ。』

…そんな印象を強く抱いたのである。

物語の流れは想像していた以上に複雑で、途中何度も読み返さないと誰のお話をしているのか把握しづらいなどの苦勞もあったが、私なりの要約はこうだ。

まず主人公は、実は『星の王子様』ではない。『飛行機乗りの『ぼく』』であるということ。ある日、不運にも飛行機が突然の故障に見舞われ、サハラ砂漠に不時着してしまう。途方に暮れながらも、必死に機械を修理しているところに突然、どう見ても場違いな王族の格好をした可愛らしい少年が現れる。その少年はどうやら別の星から来たらしく、この地球にたどり着く前は、既に他の六つの星々を旅してきたとのことだ。その六つの星々がまた、奇妙な星ばかり。『王子さま』が発する言葉ひとつひとつが荒唐無稽すぎて、『ぼく』ははじめ本気で取り合おうとはしなかった。砂漠の真ん中で死ぬかもしれない緊急事態なのだから、飛行機の修理をしながら片手間に聞くといった感じだ。『王子さま』はこんなことを話している…。

そもそも『王子さま』はなぜ自分の星を旅立たねばならなかったのか。彼の住んでいた星は非常に小さな小惑星であり、家一軒ぶんよりほんの少しだけ大きいくらいだ。彼はそこでたった一人で暮らしており、ずっと孤独だった。ある日、風に乗って飛んできた植物の種を植えて大事に育てていると、それはもう見事な『バラの花が一輪咲いた』。彼はすごくこの花を愛しく思うのだが、バラはとんでもないわがままな娘であり、呆れた『王子さま』は遂にこのバラと喧嘩別れをしてしまう。これが自分の故郷を離れるきっかけとなる。

そして、威張ってばかりの王様がいる星、他人から褒められることにばかり執着する男がいる星、酒浸りの男がいる星、お金儲けしか頭にない男がいる星、一分おきに街灯を灯けたり消したりと休む暇もない男がいる星、数字や知識の収集にしか興味を示さない地理学者がいる星…、これら六つの星々を彼は旅するが、どこも『王子さま』が友達になりたいと思える人物などいなかった。

延々と自分の過去に起きた出来事を話す『王子さま』、それを聞きながら修理を続ける『ぼく』という構図が続く。

ある日、『王子さま』は地球上に何千本も咲き乱れるバラの花を見てしまう。故郷の星に一輪だけ咲いたバラこそが、唯一絶対の、最高に美しい花だと信じていたのに、実はありふれた平凡な花に過ぎなかった事実を知り彼は大声で泣く。

その後、彼は一匹の『キツネ』と出会う。彼は孤独で寂しかったので、キツネに友達になってほしいと頼むが、キツネははじめ、この申し出を断る。一度、かけがえの無い親友になってしまうと、今度はいつか来る別離の瞬間が辛くて悲しくなってしまうからという理由だった。このキツネは非常に頭が良く、冷静に、そして客観的な判断力を有していたが、『王子さま』の汚れない純真な心を見るうちに、自然と友情を分かち合う仲へとなっていく。そして、『王子さま』は地球で数え切れないバラを見た話、故郷の星に咲いたバラの話を打ち明けたところ、キツネは次のようにアドバイスをする。

『もう一度、君が見たバラを見に行ってください。
きっと、君の好きだったバラとはどれひとつ同じバラは無いはずだから。』

キツネに言われた通り、数え切れないバラを再び目にした『王子さま』は気づく。

「キツネくんが言うことは本当だ。

確かに見た目はみんな同じバラだけど、僕が大好きだったバラとは似ても似つかないし。

ああ…やっぱり僕がづきだったバラはこの世に1つしか無い大切なバラだったんだ。」

そのキツネとも遂に別れる日が訪れる。彼は、悲しみながらキツネと親友になれたこと以上に、別離の悲しさを嘆き、心を許し合える友達になってしまったことを後悔する。だが、そんな彼を見てキツネは『王子さま』に慰めるとも、諭すともなくこう言う。

「確かに別離は悲しいことだね。でもこうやって僕たちが出会って友達になれたことは

決して無駄なんかじゃない。離れることにだって必ず意味があるはずなんだ。」

そうして、また『王子さま』は孤独に戻った。そんなある日、『王子さま』は一匹の猛毒を持った蛇に出会う。もう彼は友達を作ることを諦めて、故郷の星に帰りたいと、蛇に相談する。蛇は彼に向かって、

「もし本当にそう願うなら、そのときは私に咬まれるといいし。

そうしたら自分の元いた所に帰れるから。」

…そんなふうに『死ぬ』ことを提案される。さてここまでの間、主人公の『ぼく』はずっと飛行機の修理をしながらも、だんだんとこの『王子さま』が体験した話に興味を持ち、いつの間にか彼の話に惹かれ、友情のような気持ちが芽生えてくる。だが、悠長なことを考えている余裕はもはや無かった。命の綱である水の蓄えがいよいよ底を尽いてきたからだ。すると『王子さま』は、何と何の目印も無い広大な砂漠を歩いて水が飲める場所を探そうと、一人歩き始めた。主人公である『僕』も仕方なく彼の後に付いて行く。

「見つかるわけがないじゃないか。」

と心の中では『王子さま』の無謀さ、呑気さに呆れつつも、二人は歩き続ける。彼はこう言う。

「星々が美しいのは、ここからは見えない花がどこかで一輪咲いているからだね。」

主人公の『ぼく』はこんな死と隣合わせの言葉に共感してしまう。また、彼はこう言う。

「砂漠は美しいね。砂漠が美しいのはどこかに井戸をひとつ隠しているからだね。」

なぜだか『ぼく』は彼のセリフに、確かにそうかも知れないな…と感じてしまう。だがそんな『王子さま』には何の緊迫感も感じられない。まるで『死』というものの対する恐怖心が無いかのようだ。だが、信じられないことに、二人は本当に砂漠の真ん中でオアシスを見つける。

二人は存分に水のありがたさを味わった後、『王子さま』がこの地球に溶着してちょうど一年を迎えようとしていることや、まさに今いる場所が地球に最初降り立った地点であることを、『ぼく』に伝える。『ぼく』にはそれが、彼が故郷の星に帰りたがっており、最後の別離を予感させるようで、急に怖くなる。そして、『ぼく』は『王子さま』が今まさに猛毒の蛇に自ら身体を預けて咬まれる場面を目撃することになる。『王子さま』は動かなくなり、『ぼく』が嘆き悲しみながら眠りに落ちたが、翌朝目が覚めると彼の亡骸は忽然と姿を消していた。

…ずいぶん長くはなったが、これが一冊の文庫本から読み取った要約である。さて、ここからが私なりの解釈に移るわけだが、この物語は最初にも述べた通り、大人が読んでも難解とも思えるさまざまな批判的メッセージが、各登場人物やそれぞれの描写場面に盛り込まれている。つまり、体裁こそファンタジーな空想物語ではあるが、むしろ現代に生きる大人達への痛烈な批判を内側に秘めた警告…、言い換えれば『寓話』というジャンルに属する文学作品だと認識することが、この『星の王子さま』を、より正しく理解する上での重要なアプローチなのではないかと考える。

そこで、それぞれの登場人物…、ここでは動物なども含めてそう呼ぶことにするが、全ては私たち人間が多かれ少なかれ執着しがちな『願望』、または『あこがれ』、あるいは『恐怖』を象徴したものであり、それらを具現化した姿として物語に出てくることに注目したい。

まず、『主人公の『ぼく』』はごく普通の人間ではあるが、『小型飛行機パイロット』という職業からして、『自由に大空を飛びたい』という『少年』の純真な心と、『社会規範に囚われた『大人』の常識との間で揺れ動く、『現代社会に生きる人々』を表している。

次に、『故郷の星を離れるきっかけとなった『一本のバラ』』についてだが、これは、『王子さま』、いや私達現代社会に生きる人々全員にとって、『かけがえの無い『恋人』のような存在』なのだろう。この場合、『恋人』という言葉の代わりに、『愛する我が子』や、『配偶者』と置き換えても構わない。別に結婚しておらずとも、その人がこよなく愛して止まない『何か』であることに違いはないだろう。確かに故郷に生えた『一本のバラ』はわがまま放題だったかもしれない。そんなバラに対し、『王子さま』もつい不満が爆発し、故郷の星を捨て旅立ってしまうが、その後でひとりバラが泣きながら、本当は王子のことを心から信頼し、大好きだったことを呟く場面を描く場面が私はものすごく印象的で気に入っている。きっと作者は、

『たとえ恋人のようにすぐ身近にいたいと思える存在の人であったとしても、
耳に聞こえる言葉だけが必ずしも本当の気持ちを表しているとは限らないことがある。』

…そんなメッセージを私達に伝えたかったのではないだろうか。花のことについては、私はあまり詳しくないのだが、『バラは『高貴』を表す』とどこかで聞いたことがある。自分の気持ちを素直には伝えられないバラの、『自尊心の高さ』が、結局は『王子さま』と『一輪のバラ』を引き裂いてしまうことになる…、そんな愚かしくも悲しい人間の性^{さが}を、作者は描きたかったのかもしれない。

また、物語の中で『王子さま』は地球にやって来る前に、既に六つの惑星を旅してきているのだが、これらも全て人間がつい溺れがちになる『願望』の象徴を表すと同時に、それが如何に品性を卑しくさせ心を醜くさせるものか、サン・テグチュペリは痛烈に批判している。以下、六つの惑星をそれぞれ箇条書き形式で並べてみると、

- 威張ってばかりの王様の星…『権力欲』
- 他人から褒められたい男の星…『名誉欲』
- 酒浸りの男の星…『快楽への誘惑』
- 金儲けしか考えない男の星…『金銭欲』
- 休まない男の星…『怠惰への極度な恐怖』
- 地理学者の星…『知識欲と感情の否定』

…、どれも多かれ少なかれ私達現代人が執着しがちな『願望』である。また厄介なことに、これらは全く無くてもよいわけではなく、個人の心にある程度は必要なものでもある。これら6つの願望は、一概に全てを『悪者にする』ことも出来ないが、多く持ちすぎることの愚かさもまた、同時に作者は私達に教えたかったのだ。

では、『キツネ』は何の象徴なのだろうか。私は、『賢さ』や、『客観的な判断』といった概念を、このキツネの言動に重ね合わせているのだと思う。昔から、ヨーロッパではキツネは、『狡猾でずる賢い利己的』な役柄で童話などに現れることもあるので、判断が少し難しいのだが、この『星の王子さま』に登場するキツネは、そんな打算的な部分も多少は持っていたものの、『王子さま』の何にも代えがたい純真な心の前に、遂に打算を超えて彼になついてしまう…、そんな憎めないキャラクターであると思いたい。そしてこのキツネは、『王子さま』に、大事なアドバイスを行う存在でもある。やはり、『知恵』のシンボルとして描かれていることは間違いないようだ。私は、

『地球上に咲く何千本のバラなどより、君にとって一番大切なのは、
故郷の星に咲く一本のバラなんだよ。何故なら、それは君が一生懸命、
水をあげて愛情を注いだバラだから。』

と、諭すキツネのセリフがとても好きなのだ。

そして、『猛毒の蛇』が登場する。この蛇が何の象徴であるのか、私は解釈に悩んだ。昔からキリスト教の聖書にも、イブを唆して

禁断のリンゴの実を食べさせ、『神の呪い』を受けるように仕向けたり、『死』をイメージさせたりと、悪の権化のように描かれている場合が多いが、それと同時に古代文明において『永遠の生』や知性』を表現する存在』として扱われていることもある。そこで私には、この物語に登場する蛇はやはり『死』の象徴であるが、それと同時に『永遠の生』を表しているようにも思える。そして、蛇に我が身を晒して咬ませたのは、『王子さま』の自らの意志であり、蛇自身は必ずしも彼に騙したり唆そうという悪意は無かったのではないかと思うのだが。正直なところ、作者がこのラスト近くのシーンで何を私達読者に語りかけたかったのか、くみ取れ切れない『謎』の部分が残ったようでもある。

最後に、肝心の『王子さま』はいったい何者だったのだろうか。ファンタジー、すなわち幻想の世界、作り話だといってしまえばそれまでだが、少なくとも見た目は私達と同じ人間、それも男の子のように見えるが、いわゆる生身の身体を持つ人間ではあるまい。宇宙を身体ひとつであちこち旅し、動物と会話し、忽然と亡骸が消える…。その意味で、絶対に『人間』ではない。これは少し突飛な私だけの解釈だが、『王子さま』は実は肉体を持たない、純粋な一種の『**清らかな思念エネルギー体**』だと考えると、全てのつじつまが不思議と合うのだ。『思念エネルギー体』とは、肉体などの物理的な実態を持たない、精神エネルギーだけで出来た生命体であり、現代の地球の科学ではその存在証明こそ不可能である。しかし、人間や動物に対しても、時には実体化して姿を見せたり触れたりすることも可能であるとする考え方を私は採用したい。

地球で暮らす間、彼はかりそめの肉体を擬似的にはまもってはいるが、それは所詮一時的な憑代に過ぎない。そうすれば、不可思議極まりない『王子さま』の行動について、一応の科学的説明も可能となる。また、『王子さま』にとっての『死』とは、真空の宇宙を生身で移動することや、物理的に地球の砂漠に落下・激突することでもない。さらに、砂漠の暑さに負けることなく、飢えや渇きによってもたらされる苦しみでもない。『思念エネルギー体』である彼にとって、『生きる意味を見失ったとき』や『絶望に心が打ちのめされたとき』ということになるだろうか。

先に『清らかな』という修飾を施したのは、『王子さま』には、人間の大人なら誰しもが多かれ少なかれ持っている『疑い』や『利己心』、『さまざまな欲得』…そういった汚れた心を全く持たない『純真無垢な子ども』の象徴として、読者の前に姿を現したわけだ。そして、『出会い』と『友達との絆』という希望を胸に、故郷の星を離れてみたものの、地球を含めて七つの惑星を巡った果てに、『王子さま』は結局心を満たしきれず、地球でも王子を悩ませた『孤独』から逃れることは出来なかったのである。そのため、彼はもう地球にこれ以上残る意味を失ってしまい、やはり最初の自分の故郷の星で待つ、あのバラコソが一番愛おしい存在であることを改めて悟ったからこそ、もう一度戻りたいと心から願ったのだろう。その為には、物理的なかりそめの肉体が邪魔になる。いったん、純粋な『思念エネルギー体』に戻るためには、その肉体を捨て去らなければならない。

よって、毒蛇も『王子さま』もそれをお互いに分かった上での『自殺行為』だったと考えると、私達人間が一般的に想像する『死』のイメージとはまた違って、新たな生命体への生まれ変わりを作者は描こうとしたのではないかという考察も可能なのではないだろうか。

さらにこの物語では、『王子さま』が地球以前に訪れた星の数は6つであり、地球を含めて7つになる。なぜわざわざ地球を含めて7つの星々になるように作者は設定したのだろうか。作者のサン・テグジュペリはフランス人であり、彼自身も敬虔なキリスト教信者だったようだ。私は宗教には全く詳しくはないが、それでも『**七つの大罪**』という言葉を目何度かある。人間が陥りがちな、神の導きの背くような醜い行いを戒めるために、七種類のタブーを定めたものであると記憶しているが、それは『暴食』、『色欲』、『強欲』、『憤怒』、『怠惰』、『傲慢』、『嫉妬』となる。どこが『星の王子さま』に登場する、滑稽な星々と重なる部分がはないだろうか。

■威張ってばかりの王様の星…『権力欲』⇒〈〈傲慢の罪〉〉

■他人から褒められたい男の星…『名誉欲』⇒ 〈〈嫉妬の罪〉〉

■酒浸りの男の星…『快楽への誘惑』⇒〈〈色欲の罪〉〉

■金儲けしか考えない男の星…『金銭欲』⇒〈〈強欲の罪〉〉

■休まない男の星…『怠惰への極度な恐怖』⇒〈〈憤怒の罪〉〉※休むことを否定し、憎む。

■地理学者の星…『知識欲と感情の否定』⇒〈〈暴食の罪〉〉※知識を貪るだけばかりで、満足することをしない。

…というふうに、読み手に連想させるように作者が仕掛けた設定だと私は読み解くのだが。

ただし、7つ目の星にあたる地球については、残る罪は『怠惰』であるが、どうもこれはお話の流れともそぐわない気がする。そこでこれも私の個人的な推理なのだが、こんな結論に至った。

『地球上には先述の6つの『罪』に溢れている。

何十億という人間がみな何かしらの『罪』を背負って生きている。

その点、『王子さま』は先に挙げた六つの『罪』のどれひとつももっていない。

だが、そのかわりに『孤独から逃れたい願望』がとても強かったのではないかと。

地球上のどの人間よりも、彼が一番『さみしさ』を心に持ち続けていた。

それが果たして『罪』と呼べるものかどうかは分からないが、

『王子さま』に欠けている部分、あるいは不完全さを見出すとしたら、これだ。

ひよっとすると、現代で社会問題となっている『ネット依存症』のような心の病、

すなわち誰かと四六時中繋がっていないと不安でいたたまれなくなる人間の弱さ

みたいなものが、『王子さま』のキャラクター設定として組み込まれているとしたら、

この物語の印象が少し変わってくるような気がする。

実際に読めば、後から無限にさまざまな解釈が出来てしまえる空想小説。それでいて、痛烈な現代社会への批判を込めた『寓話』。子どもだけが持つ、純粋な心を持ち続けることの尊さ。いや、実に奥の深い、いや深すぎる物語である。だが、この『星の王子様』、どこの図書館や書店、学校の図書室に当たり前のようにならんでいる名作なことは、私なりに理解出来たが、正直なところ小学生や中学生が読んだとしても、その本当に意味するところは絶対に分からないだろうな…とも思う。これは是非大人のみなさんに、時間があるときに、じっくり味わってもらいたい、そんな私のお勧めの一冊に加えたいと思う。